

祖母 上野イトの事

三好三恵子

(女子中学・高等学校教諭)

祖母上野イトは明治二十八年十一月三日、滋賀県高島郡今津町にて、松見家の長女として生を受け、京都府立第一高女、同国語漢文専攻科を大正五年に卒業、梅花高女に就職。大正九年一月二十九日、同志社大学神学部卒、大阪教会伝道師であった上野義一と結婚した。大正十三年、夫義一の京都三条YMC A主事就任（後に同志社高商奉職）に伴い、同志社高女教諭となり、昭和三十六年、六十五歳で停年退職するまで、三十八年間勤めた。しかし、昭和五十九年二月三日、八十八歳三カ月で天国に召される日まで、心は常に同志社教師であった。

祖母は校祖新島襄を尊敬し、同志社を愛し、こよなく生徒達を愛した。母校府立第一高女からの条件の良い招聘を断わってまで、同志社の宗教教育を高く評価し、同志社教師としての誇りを堅持した。生徒達にも、同志社で学ぶ誇りを教えた。その結果であろうか、家には多くの教え子が晩年まで訪れていた。

祖母の生涯で悲しみの涙に咽んだ日が五度あったと思う。昭和二年、長男陽一郎を、昭和五年に今津の父、六年に母、十年に次女明子を、天国に送り、そしてゆっくり老後をと

思った矢先の昭和三十七年一月、夫義一の急逝にあった日であろう。しかし信仰によって悲しみの日を乗り越えた。

悲しみにも増して、喜びの日も多かった。

祖母は若き教師の日、同志社高女に皇后陛下をお迎えして御前授業を果した光栄を無上の喜びと話す明治女の気位を持っていた。また同志社の講演に迎えたヘレンケラー女史と、特別に握手を許された日の事を、顔を輝かせて語ったものであった。

家庭にあつては、一人残った娘、星子の結婚と孫三人の出生、そして曾孫五人まで見る事が出来た。祖母は毎年の年賀状に自作の和歌を一首添えていた。最後の年の年賀状には、「子や孫や曾孫たちにも囲まれて こよなき幸を祝う我かな」と書いた。この最後の歌の通り、子や孫や曾孫たちにも囲まれて、オバアちゃん、おばあちゃんと叫ぶ愛惜の涙に送られつつ、二月三日の夕方、その靈魂は清浄の雪の中を通り天上に飛び立って行ったのである。

祖母は昭和七年に岩倉に家を建て移り住んだ。夜は孤や梟が家の廻りで鳴いていたという。私が同志社女子中学に入学した当時も、



京福電車が十五分に一回走っていたのみであった。父母が今治教会に赴任していたので、祖母は昭和三十四年から次々と姉と私と弟を引取っては、愛する同志社に学ばせた。学校の帰りに、食べ盛りの孫達の為に、毎日沢山の食糧を出町の市場から買ってくれた祖母の元気な早足姿が、懐しく思い出される。退職後も、不自由な目で台所に立っては、私達に少しでも勉強の時間を与えようと心がけてくれた。やがて私達も成長し、腰の骨折のため、立って歩けなくなった祖母を助けて暮らす事となった。姉は結婚して祖母の家の向いに住み、私も隣に家を持ち、弟は岩倉病院医師となり、祖母と共に住むようになった。一週間一度、父母が大坂から帰った日は、一族十三人必ず食卓を囲んだが、それは祖母にとってこの上ない幸せな時であった。

視力の衰えにもかかわらず、拡大鏡に頼って常に書物を読み、とりわけ聖書は声をあげて読み、驚くほど多くの文を書いた。疲れると横になり、ラジオを聴いた。NHKの教養番組やニュースを通して、私達以上に世の動きを知っていた。「忙しい、忙しい」と一日を大切に、充実して前向きに生きた祖母は、

また八十八歳の最期まで、友人や昔の生徒達に大きな影響を与えていたと思う。物質に拘泥せず、愚痴を言わず、人の悪を思わず、祈りの人であった。

遺稿集「牧場はみどり」が祖母の遺言となった。昭和十二年に随筆「黎明を呼ぶ者」昭和三十五年「野草の香」五十年に「ひつじ草」を出版した。祖母の残してくれた信仰の遺産は、何ものにもまして代々受継がれるだろう。祖母の遺骨は比叡のふもと、上野家の墓地に、分骨は同志社のご厚意により若王子共葬墓地に葬られた。私は祖母の作詩した同志社女子中・高校歌「同志社花の歌」を歌いつつ、愛する祖母を偲ぶ昨今である。

同志社花の歌

一、妙たえにゆかしき こむらさき

校旗の色の 花と笑み

心ひそめて つつましく

神の御声を 聞きわくる

すみれと咲かん 同志社少女カトシマ

二、四、略

岡田 久先生を偲ぶ

谷 川 孝 造

(中学校教諭)

岡田久先生は同志社中学から大学に学び、直ちに母校に教鞭をとって三十五年、実に五十八年の生涯のうち四十五年を同志社と共に歩んだ人である。

先生は世界大恐慌直前の一九二七年、昭和二年四月八日の誕生である。日本の国際連盟脱退の翌年に尋常小学校に入学、日独伊三国軍事協定成立の年に中学に入学、中学校卒業の年に敗戦、そして戦後の混乱期に工学部の前身工業専門学校を経て神学部に進んだ人である。軍靴の音の年毎の高まりの中に成長し、戦後の混乱期に学生時代を過ごしたのである。始業前の国旗掲揚・皇居遙拝や神社への必勝祈願を当然の事としていたのが急転直下、皇居への米よこせデモや戦犯断罪等々。全ての価値観や死生観の逆転する昭和の激動期に多感な青少年時代を過ごした者が、その体験―選択の自由のない体験―から育った思想は単に頭の中の学問として形成される思想より遙かに深く厳しいものがあるはずである。社会科の歴史的現象のみでなく遠い過去から人類の未来までを見すえようとする思想に裏付けられた授業を展開していたのも理解できるところである。神学部に進んだ彼はキリス

ト教や神道などを広く研究し、その蔵書も思想関係のものが多かった。また文献や資料からの研究だけにあきたらず、病を得て入院する直前迄、毎日早朝に水を浴び、禊ともいふべき体験の精進をも深めていたのである。

社会科教諭という本務のほか、各校務主任を歴任、教頭職も四期八年をつとめる等同志社中学校の中心的存在の人であった。体育館の建設工事やチャペルの音響施設改善など、その活動は多方面にわたった。

現在活発に活動する同窓会が戦後長らく沈滞している時に、新しく活力をふきこみ活性化に努力した時の学校側幹事が彼であった事もよく知られている。

個人の研究や校務での活躍もさる事ながら、先生の真骨頂は生徒との接触の場にあつたと言えよう。家庭では学校の話を余りしなかった先生が、クラス担任をした時には実に雄弁にその喜びを夫人に話されたと聞く。一九八二年に病を得て入院手術、そして静養された後の二年間の担任の時期は、先生の本当の姿はこれだと思える事が何度かあった。

ペテランでありながら空き時間にはいつも教科書を並び、資料ノートに几帳面な小さい



文字をぎっしり書きこんでいた先生。その周到な授業準備の姿勢は敬服に価するものであった。

昼休みはいつも生徒との懇談。中学校の教師は実に多忙である。熱心にカウンセリング研究をした成果を生かしての精力的な懇談。いつも生徒の一人一人にお茶のサービスをして自分はクラッカーやチーズと紅茶というのがいつものパターンであった。

クラス毎に全生徒が参加する丹後由良のキャンプも一生懸命。手術後の健康を案じて木陰へ入る事をすすめても頑として聞き入れず、焼けつく砂浜にも海の中にも常に生徒のいる所に先生の姿があった。海水浴はランニングシャツに水泳パンツ、休憩時に「生徒が手術あとを気味悪く思うとかわいそうやしなあ。」ともらされた言葉が胸にしみた。生徒をいつくしみ、いつも人への心くばりをする先生、体力の限界まで力を尽そうとした先生、その姿は痛々しくまた感動的でさえあった。

一九八四年十二月二十日は二期期の終業式であった。教員室の椅子に坐りこんで一人一人に賞讃や激励の言葉をかけながら成績表を

渡しておられる姿、それは健康であった先生にはかつてない事であった。

その日、誰にも告げず入院されたのであった。

一九八五年、昭和六十年十月十日永眠。十二日の告別式には保護者や多くの卒業生、そして多数の中学生が参列した。直接教えを受けていない一人の女生徒が霊前に捧げた手紙は、先生と生徒との暖かい心の通いを表わし多くの人々の涙をさそった。

葬列は烏丸通を南下し、同志社に別れを告げるかのように今出川通を東へ向った。

いかにも同志社の教師らしい先生であった。

教育者としてのあるべき姿を私達に示した先生であった。

常に生徒と共にあった先生であった。